ありがとう、先生

中学２年　安田　悠真

「今日からはもう、あなたの先生を辞めようと思うの。」

四月のある日、母が僕に言った。あまりに突然のことに、僕はわけがわからなかった。母はどうして急にそんなことを言うのだろう。確かに母はずっと僕のことを見守っていてくれたけれど、果たして「先生」と呼べる存在だっただろうか。僕はエイプリルフールの冗談で、母がふざけているのだろうと思った。しかし、母はいたって真面目だった。そして僕をじっと見つめてこう言った。

「あなたももう中学生。私は今日まで、自分のことを『おうちでの先生』と思ってきた。たくさん叱ったり、泣かせたりしてごめんね。でももう、おうちの先生は卒業しようかな。立派な中学生になったのだから。」

僕は母の言葉を聞きながら、ドキドキした。母に褒められたこともそうだが、一人前の中学生として認めてもらえたことが、嬉しくて照れくさかったのだ。でも、素直にそれを伝えるのが恥ずかしくて僕は

「ずいぶん叱られて、泣いたなぁ。」

とおどけて言った。母は笑って、

「あなたの周りには、私や学校の先生の他にも、たくさんの先生がいる。これからも、いろんな先生と触れ合って、心の引き出しを増やしてね。」

と言った。僕はぼんやり考えた。たくさんの先生との出会いか。楽しみだな。でも、待てよ。学校の先生以外の先生って、誰のことだろう。

その夜、布団の中で僕は、今まで出会った先生を思い出してみた。学校生活の楽しさを教えてくれた担任の先生。分かるまで勉強を教えてくれた塾の先生。いや、それだけじゃない。遊びを通して、運動の楽しさを教えてくれた祖父。けんかと仲直りを繰り返して、友情という絆を教えてくれた友達。喜びも苦しみも、分かち合えば温かいと教えてくれた家族。飼い猫のリリーからだって、小さな体からは想像もできないくらいの命の重さと、尊さを教わった。どうして僕は今まで気づかなかったのだろう。僕の周りは、素晴らしい先生だらけだった。そして、ようやく気がついた。僕の成長は、たくさんの先生に支えられていたことに。もしも先生との出会いが一つでも欠けていたら、今の僕は生まれなかった。僕はこの出会いが奇跡のようだと感じた。そして、先生への感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

僕は中学生として歩き始めた。嬉しいことも辛いことも、きっとた

くさんやって来るだろう。でも大丈夫。僕の周りには先生がいる。これからも先生との出会いに感謝し、触れ合いを大切にしながら、成長していきたい。そしていつか、僕も誰かの先生となれるよう、心の引き出しを増やしていこうと思う。